

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、すぐ諸会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。これを聞いた人々は皆、驚いて言った。

「あれは、エルサレムでこの名を呼ぶ者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。

かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、その陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。そこで、サウロの弟子たちは、夜の間にも彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁伝いにつり降ろした。（使徒9：19b～25）

サウロはアナニアによってキリストの福音を知らされ、目が開かれ、洗礼を受けた。数日間、ダマスコの弟子たちと共にいたが、すぐに、ユダヤ教の諸会堂で、「この人こそ神の子である」と、主イエスのことを宣べ始めた。これを聞いた人々は皆、非常に驚き、彼はエルサレムで、イエスの名を呼ぶ者たちを滅ぼしていた男ではないか。ダマスコに来たのも、イエス信者を縛り上げ、祭司長たちの所へ連行するためではなかったかと言いつつ。ところが、サウロはますます力を得て、イエスがメシア（キリスト）であることを論証し、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。著者ルカは、サウロは回心後、直ちに、福音宣教に乗り出したと書いている。

ところが、パウロが書いたガラテヤ書1章には、下記のように書いている。「しかし、母の胎にいたときから私を選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子を私に示して、異邦人に御子を告げ知らせるようにされたとき、私は、人に相談することはせず、また、私よりも先に使徒となった人たちがいるエルサレムへ上ることもせず、直ちにアラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻ったのです。それから三年後に、エルサレムに上ってケファを訪ね、彼のところに十五日間滞在しました（1:15～18）。」サウロを選び分け、恵みによって召し出してくださった時が、回心の時であるならば、サウロはその時、誰にも相談せず、エルサレムにも上らず、アラビアに出て、そこから再びダマスコに戻ったと書いている。アラビアにどのくらいいたか分からないが、しばらくの猶予の時を持ったと述べている。著者ルカは、サウロは回心後、直ちに宣教を始めたと書いて、使徒言行録とガラテヤ書では食い違いがある。ガラテヤ書のしばらく猶予を持ったというパウロの言葉の方が信頼できるのではないか。使徒言行録は、サウロの宣教の熱心さを浮き彫りにしたいルカの思いが込められているように思える。

いずれにしても、ユダヤ教からイエスを信じる者に回心したという噂は知れ渡った。あれだけ熱心なファリサイ派の学徒がイエス信者になったので、ユダヤ人たちは驚くと共に、サウロを裏切り者と見なし、殺害を企むようになった。その陰謀はサウロの耳にも入った。サウロの殺害を狙う者たちは、サウロが町から逃げ出して行くのではないかと、昼夜、町の門を見張った。そこで、サウロの弟子たちは、夜の間にも連れ出し、籠に乗せて町の城壁伝いにつり下ろして、逃がした。熱心なユダヤ教徒が、イエスを信じる立場に変わることは、命を懸けることだったのである。